

木内葵：危険地報道と自己責任

要旨

本研究では戦場ジャーナリストを軸に、「戦場ジャーナリストの行動を“自己責任”と批判することの妥当性」について焦点を当てて検討を進めた。いわゆる自己責任批判は、ジャーナリストについての知識や関心の低さや戦争報道の重要性についての理解不足などの問題点が背景にあり、本研究が一つの問題提起となることも研究動機の中に含まれている。仮説は戦場ジャーナリストへの「自己責任」批判が、結果的に日本メディアの報道や日本自体の情報環境の品質を下げるものだとし、立証を行った。

検討を進めるにあたって対象としたのは、①「イラク日本人人質事件」で拘束された日本人男女3人②内戦状態のシリアで3年4ヶ月拘束された安田純平③過激派組織イスラム国に拘束され、殺害されたとみられる後藤健二と湯川遥菜である。

検討の結果、ジャーナリストが「自己責任」で取材することは当然であり、その取材を「自己責任」と批判することはジャーナリストの減少を促進させる恐れがあることが判明した。自己責任論による批判の過剰な広がり、日本において正確な情報が得られず、民主主義の弱体化を招きかねないため、「戦場ジャーナリストを“自己責任”と批判することの妥当性」を社会は改めて見つめ直す必要があると考察する。